



えんちょう✿つうしん④



2020年5月22日発行 札幌大谷大学附属幼稚園 園長 安井美恵子

我が家の庭の隅に、ドウダンツツジの花が咲いています。秋には真赤に紅葉し、春よりも秋の印象が強いのですが、今年は、いつもより自宅で過ごす時間が長いので、この時季に咲く白色でつぼ状の可憐な花をじっくり観賞することが出来ました。

さて、今週は各家庭(特別預かり保育利用家庭以外)に電話をかけさせて頂きました。お子様たちの様子をお聞きすることが出来、嬉しかったです。ありがとうございました。



私の子育て時代の思い出

私には娘が二人います。上の娘が幼稚園に入った年に、娘のクラスメイトのお母様(今はママ友と言いますね!)に誘われて、俳句を習い始めました。下の娘を連れて月2回開かれる俳句教室に通いました。習っているのは、10人未満の少人数で、当時30代の私が一番若くて、先生が40代、他の方は50代、60代、70代の人生の先輩でした。

毎回、俳句を最低でも5句程度作り、先生に見せてアドバイスを頂きました。また、先輩方の熟練した句を聞かせて頂き勉強になりました。習い始めの頃、下の娘は3歳未満でしたが、絵を描いたり、字を書く真似をしたり、自分も習っているつもりで私の趣味に付き合ってくれていました。

俳句を習って一番良かったことは・・・何気ない日常が、かけがえのない素敵な日々だと気付かせてもらったことです。季節の移ろいを敏感に感じるようになりました。華やかな桜の花はもちろんですが、道端にひっそりと咲く名も知れぬ小さな花や草、風の音、空気や土の匂い、雨上がりの水溜りやミミズまで、身の回りにあるものが俳句の題材になりました。因みにミミズ(蚯蚓)は、6月の季語です。

虹を絵に 描きて子どもの 笑顔かな

けんかの子 仲よくなりて しゃぼん玉

切り取って 持ち帰りたし 夏景色 (作: やすい みえこ)